

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：34507

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780327

研究課題名(和文)労働文化の遺産化をめぐる地域社会のポリティクスの社会学的研究

研究課題名(英文)Sociological study of local politics and heritagization of labour culture

研究代表者

木村 至聖(KIMURA, Shisei)

甲南女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：50611224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2000年代以降の日本の旧産炭地における「労働文化の遺産化」現象が、地域社会のポリティクスのなかで、いかにして展開しているのかを明らかにしようとしたものである。調査の成果として、日本における「労働文化」は地方中核都市を中心とした地域文化として継承・保存されつつあるが、そこにナショナル・スケールの統治権力、グローバル・スケールの競争原理が働くことで、結果としてナショナルな歴史の表象が構築されつつあることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the process of “heritagization” of labour culture occurred in former coal mining areas. Using data based on fieldwork conducted in some (ex-) industrial cities and semi-structured interviews with several actors related to industrial heritages, I found that labour culture is “heritagized” not as class culture but as local culture under the influence of state power and global competition.

研究分野：地域社会学、文化社会学

キーワード：文化遺産 産炭地 炭鉱 記憶 産業遺産

1. 研究開始当初の背景

近年、炭鉱の文化に注目する動きが目立ってきている。2009年1月には「九州・山口の近代化産業遺産群」がユネスコ世界遺産の暫定リストに記載され、2011年5月に山本作兵衛の炭鉱記録画がユネスコの「世界記憶遺産」に登録されている。他にも、かつて炭鉱の島であった「軍艦島」の上陸観光解禁(2009年4月)、「文化」資源としての炭鉱」展の開催(2009年、目黒区美術館、美連協大賞受賞)、炭鉱を舞台とした映画の公開(『フラガール』(2006)、『東京タワー』(2007)、『信さん 炭坑町のセレナーデ』(2010))など、2000年代以降、炭鉱はにわか文化シーンで注目を集めている。

こうした動きは、1970～80年代に端を発する労働文化の再評価というグローバルな潮流のなかに位置づけられる。この時期の先進国における経済・産業構造の転換(脱工業化)は、労働者階級・産業都市の凋落をもたらした。これに対し、1968年以後の都市社会運動の高まりのなかで西欧各地に生まれた左翼政党系の地方政府は、社会的包摂の手段として、かつての労働・産業の遺産を活かした文化政策を積極的に講じてきたのである(Bianchini 1993)。

1980年代に入ると、こうした文化政策は、新保守主義・新自由主義の台頭にともない、次第に都市のマーケティングに結び付けられ、「助成」は「投資」へと置き換えられていった(Bianchini 1993)。そのなかで、労働文化の遺産化をとまなう文化政策は、大きな論争を引き起こした。いわゆる「遺産産業」批判(Hewison 1987)とそれへの反論である。ヒュイソンらは、大衆化した文化遺産や博物館の試みを、保守至上主義、商業主義、労働者階級の経験の矮小化であると批判した(Hewison 1987)。そしてこの批判に対しては、文化遺産は政策立案者たるエリートたちの意図を超え、労働者階級は自ら声をあげることができるという反論がなされてきた(Samuel 1994)。

こうした論争には決着はついていないが、近年は実際の産業遺産の活用現場を対象とした事例研究も蓄積されてきている。たとえば、南ウェールズのロンダ渓谷では、労働組合の幹部や地元の郷土史家たちが、地域に根づいた労働主義の伝統を子や孫に継承するために、炭鉱遺構の保存を目指した事例が報告されている。ところが、資金提供先を模索するなか、外部コンサルタントの提案によって隣接自治体にもまたがる大規模なヘリテージ・パークの計画が実現したことで、当初の労働組合や地域住民が計画の主体から外れていってしまったことが明らかにされている(Dicks 2000)。

また、産業遺産発祥の地である英国で、現在では産業遺産の保存・活用のモデルケースとされているアイアンブリッジ峡谷(セヴァーン峡谷)の事例では、合併によって生まれ

たニュータウンの開発公社が博物館のスパンサーとなったことが、現在のツーリスト・アトラクションの「成功」の原因とされている。だが事例研究のなかでは、開発の過程で地元で製鉄業に関わった人々がほとんど姿を消してしまったことも指摘されている(Storm 2008)。

1994年の世界遺産委員会でも、世界遺産のリストからテーマ的な不均衡を是正しようとするグローバル・ストラテジーが採択されたことで、労働文化、産業遺産の比重が高まり、2000年代に入って「労働文化の遺産化」というイシューはますます重要性を増しているが、先にみた事例研究のように、グローバルに進行する「労働文化の遺産化」が、実態としていかなる社会的意味・影響力を持っているのか、検証していくことが必要である。

2. 研究の目的

以上のような先行研究と社会的課題を踏まえて、本研究は海外事例との比較研究を視野に入れた、国内事例の検討を行なうこととした。

我が国における「労働文化の遺産化」現象は、あくまで消費文化のうちのノスタルジーの流行にとらえられ、また地域社会の側でもそうした傾向を利用した観光資源の発掘、その活用による経済効果という側面ばかりが目目されがちである。だがそもそも西欧で試みられた文化政策としての「労働文化の遺産化」は、没落した産業都市の労働者、地域住民の社会的包摂という目的を持っていたはずである。もっとも先にみた通り、当の西欧社会での文化政策も、社会的包摂という観点からは多くの批判的研究が蓄積されているが、また一方で政策が効果的に機能することで、元労働者や地域住民がプライドを取り戻し、自らの文化を次世代に継承しつつ新たな地域の産業や文化を創造しようと積極的に関わるようになった事例も報告されている(Wray 2011)。こうした点からも、日本における「労働文化の遺産化」を捉える際も、観光による経済効果にとどまらない社会的視点が必要であることが指摘できるだろう。

木村(2009など)はこれまでも、日本における産業遺産の表象がいかなる特徴を持ち、地域社会をめぐるいかなる力学でそれが生み出されているのかについて研究してきた。そのなかで、国内における産業遺産の保存・活用事例においては、英国ほど元労働者の関わりが顕著にみられず、その代わりに元労働者ではないが、いま現在、産業遺産の周辺地域に居住する人々がその保存活用を支えている実態が明らかになった。その背景には、戦後日本経済の構造転換を支えた「労働力流動化」政策(高橋編 2002)という特有の事情がうかがえるが、「労働文化の遺産化」をめぐるても、こうした国ごとの経済・文化に関する政策やその歴史、統治構造とい

った要素を考慮し、日本の事例を脱工業化後のグローバルな文脈に位置づけて理解する必要がある。

そこで本研究では、冒頭でも紹介した 2000 年代以降の日本（とくに旧産炭地）における「労働文化の遺産化」現象をめぐる、1）国内においては「労働文化」が、階級文化としてよりは地域文化として「遺産化」されつつある、という仮説を設定した上でそれを検証し、2）そこでの「地域」がいかなる人々が参加する、いかなる範囲のものとして想像されつつあるのかを明らかにしようと試みた。3）さらに、こうした「労働文化」とその土台となる「地域」の再構成が、いかなる社会的力学のもとで進行しているのか、それが現代日本社会にとって持つ意義について検討することとした。

3. 研究の方法

本研究では、日本における「労働文化」の特徴をあらわす事例として、8 県 11 市が関わって 2009 年にユネスコ世界遺産暫定リストに記載された「九州・山口の近代化産業遺産群」（以下、「九州・山口」）に注目した。「九州・山口」をめぐるのは、現在 8 県 11 市の共同提案というかたちになっているが、もともと 2006 年 11 月に文化庁に共同提案された時点では、九州を中心とする 6 県 8 市から成っていた。この初めの共同提案から現在に至る過程で、世界遺産登録の実現に向けたテーマや構成資産の検討が繰り返され、筑豊炭田を代表する福岡県田川市がリストから外される一方で、岩手県釜石市、静岡県伊豆の国市が加わるなど、調整が続けられていた（科研申請時）。

こうした構成資産の取捨選択をめぐる、地方自治体間の連携の過程は、本研究で仮説として設定した「地域文化」としての「労働文化」について検討する上で格好の対象である。ここで「九州・山口」という枠組みによって表象されようとしている「労働文化」は、いかなる社会集団を代表する文化なのか、そしてそれが基盤とする「地域」とは、いかなる人々が参加する、いかなる範囲のものなのか。

以上の問いを検討する上で、本研究は 1）言説としての文化遺産、2）リスケーリングという二つの分析視点を用意する。まず「言説としての文化遺産」という視点は、「文化遺産は偉大なもの、美しいもの、古いものである」とする今日の文化遺産をめぐる先入観を、「権威づけられた文化遺産言説」（the Authorized Heritage Discourse: AHD）（Smith 2006）として批判し、それに対して文化遺産は言説によって構築され、創造され、構成され、反映される「プロセス」としてとらえるものである（Smith 2006; Smith & Campbell 2011; Waterton 2010）。こうした言説への注目は、「九州・山口」の構成資産をめぐる取捨選択の過程、自治体の合従連衡のポリティクスを分析する上で有効であると考えられ

る。

さらに、こうした自治体間の合従連衡、国の文化財と世界遺産の関係について考察する上で、地理学における「スケール」の視点が補助線となる。「スケール」という概念は、ある種の社会的活動のプラットフォームあるいは器として、社会的に生産されるものである（Smith 1995）。ここから、プレナーは資本の蓄積危機や社会統合の危機に直面した国家が統治の単位（スケール）を自在に切り替えていくという「リスケーリング」の視点を提唱しているが（Brenner 2004）、本研究の対象となる「九州・山口」をめぐるのも、それが継承されるべき文化としての地位を獲得する上で、いかなる範囲を基盤とするかという問題は、まさに「スケール」をめぐるポリティクスであると考えられる。

具体的には、各地の産業遺産の展示施設、地元自治体や関係 NPO などへの聞き取りデータ、文書および映像による産業の記録資料などを手がかりとする。

以上を踏まえて本研究では、「九州・山口」の「スケール」をめぐるポリティクス、そこでの様々な言説を分析することにより、そこに働く社会的力学や現代日本社会にとって持つ意義について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 主な成果

まず、本研究が仮説として設定した、国内においては「労働文化」が、階級文化としてよりは地域文化として「遺産化」されつつある、という命題について、まずは言説レベルで検証するため、過去 60 年間に放送されたドキュメンタリー番組の分析を行なった。対象としたのは、研究代表者が NHK アーカイブス学術利用トライアル研究の支援を得て、閲覧した約 150 の炭鉱・産炭地関連番組である。なかでも全体の番組数の約 3 分の 1 を占め、長期間にわたって継続的に番組が制作されている筑豊炭田に関する番組を中心に分析を行なった。

そのなかで明らかになったのは、まず番組化されているのはほとんどが閉山後の「貧困地帯」と化した産炭地であり、そもそも労働（者の）文化として石炭産業の痕跡が意味づけられることは非常に少なかったことである。一方で、1960 年代末から 1970 年代にかけて、旧産炭地では元労働者や地元住民といった当事者による記憶の記録の試みが始まり、番組はその活動を紹介するようになる。だがそれも、当事者の世代交代により、労働者たちの記憶というよりは、地域社会の経験の記録として継承されていくようになる。

こうした当事者の不在（あるいは世代交代）により、労働者階級の経験や文化は地域の文化へと翻案され、継承あるいは忘却されていくことが確認できた。そしてその傾向は、筑豊炭田に限らず他の地域の炭田を扱った番組からも読み取れ、また NHK 以外の民放放

送局で放送されたドキュメンタリー番組でも同様であった(5.主な発表論文等〔雑誌論文〕ほか)。

以上から、言説レベルでは、日本の労働文化(産業遺産)が地域文化として継承・保存されつつあることが確認できた。

次に、こうした言説の背後に想定されている「地域」というものが、いかなる範囲のものなのか、そしてその「地域」の再構成が、いかなる社会的力学のもとで進行しているのかを検討した。

これについては、各地の産業遺産の展示施設、および地元自治体や関係NPOなどへの聞き取りデータなどを手がかりとし、1)「平成の大合併」と呼ばれる一連の地域社会の再編、2)ユネスコ世界遺産のシリアル・ノミネーションという手法への対応の2つの「リスケーリング」プロセスを明らかにした。

まず、1)のプロセスについては、2005年に長崎市に編入合併された高島町を事例として、炭鉱閉山後、企業誘致の失敗、急激な人口流出にとともに、財政的にも危機に見舞われていた地域社会が近隣中核都市に主導権を奪われていった。しかし同時に、こうした行政の広域化のなかで、産業遺産の活用に積極的な少数の人々が連携・交流しやすい環境が生まれ、産業遺産の保存への動きが加速したことも指摘できる。

その一方で、2)のプロセスとして、ユネスコの世界遺産条約の締約国数の増加、歴史・文化を地域資源とみなし都市間競争を促す新自由主義経済のグローバルな拡大を背景として、ユネスコは1990年代頃から複数の資産をまとめて一つの遺産として登録するシリアル・ノミネーションの手法を推奨するようになっていった。国内でも、2000年代以降こうした手法への対応が推奨されるようになり、軍艦島を含む「明治日本の産業革命遺産」もまた、8県にまたがる23資産で構成される遺産群となった。こうした広域連携は初め地方主導で動き出し、地元のNPOなども中心的な役割を果たしたが、実際に世界遺産への推薦、登録の段階になると政府が強力な主導権を発揮するようになった。結果として、各地域の産業遺産は、明治日本の近代化というナショナルなスケールを持つ表象にまとめ上げられたのである。

以上のように、産業遺産は平成の大合併後の地方中核都市を主な単位とする地域文化として構成され、さらにシリアル・ノミネーションの仕組みを通してローカルな意味づけよりはナショナルな意味づけを持つものへと編制されていったことが明らかになった(5.主な発表論文等〔図書〕ほか)。

世界遺産登録決定後、こうした産業遺産のナショナルな意味づけはメディア上でも反復されることでより強化されつつあるが、また一方で、観光の現場ではそのようなナショナルな意味づけが圧倒的であると同時に、個別のガイドによる多様な表象実践も展開

されていることも明らかになった(5.主な発表論文等〔雑誌論文〕)。

(2)国内外における位置づけとインパクト

まず、本研究はたんなる産業遺産の表象の分析ではない。研究代表者である木村がこれまでの研究で得てきた全国的な旧産炭地の自治体や市民運動とのラポールを活かし、実際にその表象が生み出されるまでの過程において、いかなる社会的勢力がいかなる交渉や折衝を行ってきたか、またそこでグローバル/ローカルな文化政策の変化や、市町村合併などの社会的政治的な動向がいかなる影響を及ぼしているのかを分析する、地域社会学的視座に立っている。この成果は、5.主な発表論文等〔図書〕として挙げている研究代表者の単著『産業遺産の記憶と表象

「軍艦島」をめぐるポリティクス』が第9回(2015年度)地域社会学会奨励賞(個人著書部門)を受賞したように、地域社会学分野でも一定の評価を得ることができた。

また、本研究がテーマとする「労働文化の遺産化」をめくっては、とくに国内においては観光資源発掘の一環としてとらえられる傾向が強いが、本研究ではそれを脱工業化後の文化政策をめぐるグローバルな潮流のなかに位置づけ、その経済的な効果よりも、政治的社会的な意義に着目する。スミスらによれば、文化遺産はたんなるモノである以上に、記憶や社会的価値を再創造し、交渉し、子孫に伝えていく生きたプロセスなのであり、歴史的なトラウマや経済的・政治的变化に直面して自尊心を引き起こすためのものである(Smith & Campbell 2011)。その意味で、かつての労働者たちにとっての労働文化の文化遺産(産業遺産)は、脱工業化の打撃を乗り越え、現在の状況に対処していく上で重要なものであるといえるだろう。

しかしながら、本研究が示したように、現状の国内の産業遺産の表象は、労働者たちの文化というよりは地域文化としてのみ描かれており、本研究はその問題点を単著(5.主な発表論文等〔図書〕)などで強調してきた。この主張は、単著の出版後も、各種学会での報告・講演などで大きな反響を得ており、当該分野での重要な論点の一つとして影響を与えていくものと思われる。

(3)今後の展望

本研究では、同様のテーマで多くの先進事例をもつ英国との比較を視野に入れ、国ごとの経済・文化に関する政策やその歴史、統治構造といった要素を考慮しながら、日本の事例を脱工業化後のグローバルな文脈に位置づけて理解することを目指してきた。だが今回の研究計画においては、海外の事例については文献からのみの研究であったので、今後は実際に現地での比較調査を展開していく必要があると考える。これにより、たんに今日の「労働文化の遺産化」の日本の特徴を明ら

かにするだけでなく、戦前・戦後を通して近代国家日本を形成してきた国土政策・労働政策・経済政策の功罪を浮き上がらせることができるだろう。

(4) 予期していない事象によって得られた知見

科研申請時には予定していなかったが、研究期間中(1年目、2年目)に、NHK アーカイブスに保存されている番組を研究者向けに公開する学術利用トライアル(関西トライアル)に応募し、第1期および第3期に採択された。それぞれ「テレビ番組における産炭地の表象とその変容に関する研究」、「炭鉱」イメージはいかに再生産されたか 筑豊炭田の事例を中心に」というテーマであり、本研究でいう「労働文化」が階級文化としてではなく、地域文化として「遺産化」されるという仮説の検証に対応するものである。これにともない、当初は文書資料を中心に言説を分析する予定だったが、横浜市の放送ライブラリー(民放放送局の番組を保存している)などの利用も組み合わせつつ、映像資料中心の分析に切り替えた。これにより、ナショナルなスケール、かつドキュメンタリー番組の記録の残る60年という長いスパンのなかで、「労働文化」の地域文化化を捉えることができた。

また、研究期間の最終年度(2015年)には、本研究の主要な研究対象である長崎市の軍艦島が「明治日本の産業革命遺産」の構成資産の一つとしてユネスコ世界遺産に登録された。このことは研究機関の初年度(2013年)に、政府がこの遺産群を世界遺産推薦候補とした時点で予測することができたため、当初は予定していなかったが、世界遺産登録決定後の最終年度に重点的な現地調査を行なうことで、世界遺産化がもたらす地域への大きな影響を確認することができた。さらに、世界遺産登録直前には、世界遺産委員会の委員国である韓国との間で戦時中の強制労働の認識・説明をめぐる軋轢が生じたことは、労働文化の遺産化というプロセスにおいて、植民地主義、ナショナリズムという要素の検討が不可欠であるという知見を強化することになった。

参考文献

Bianchini, F., 1993, "Remaking European cities: the role of cultural policies", Bianchini, F. and Parkinson, M. eds., *Cultural Policy and Urban Regeneration: The West European Experience*, Manchester and New York: Manchester University Press, 1-20.

Brenner, N., 2004, *New State Spaces: Urban Governance and the Rescaling of Statehood*, Oxford: Oxford University Press.

Dicks, Bella, 2000, *Heritage, Place*

and Community, Cardiff: University of Wales Press.

Hewison, Robert, 1987, *The Heritage Industry: Britain in a Climate of Decline*, London: Methuen.

Samuel, R., 1994, *Theatres of Memory. Volume 1: Past and Present in Contemporary Culture*, London: Verso.

Smith, L., 2006, *Uses of Heritage*, New York: Routledge.

Smith, L. & G. Campbell, 2011, "Don't mourn organize: heritage, recognition and memory in Castleford, West Yorkshire", Smith, L., P. A. Shackel & G. Campbell eds., *Heritage, Labour and the Working Classes*, New York: Routledge, 85-105.

Storm, Anna, 2008, *Hope and Rust: Reinterpreting the Industrial Place in the Late 20th Century*, Stockholm Papers in the History and Philosophy of Technology.

高橋伸一編, 2002, 『移動社会と生活ネットワーク 元炭鉱労働者の生活史研究』高菅出版.

Waterton, E., 2010, *Politics, Policy and the Discourses of Heritage in Britain*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Wray, D., 2011, "Images, icons and Artefacts: maintaining an industrial culture in a post-industrial climate", Smith, L., P. A. Shackel & G. Campbell eds., *Heritage, Labour and the Working Classes*, New York: Routledge, 106-18.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

木村至聖, 「『観光のまなざし 3.0』は産業遺跡をいかにデザインするか?」『観光学評論』4(1): 43-55, 2016.(査読有)

木村至聖, 「近代産業における「非業の死」はいかに記憶されるか」『日仏社会学会年報』26: 17-30, 2015.(査読無)

木村至聖, 「記録」された炭鉱の「記憶」と映像アーカイブの可能性 筑豊炭田の事例を中心に」『ソシオロジ』59(1): 57-73, 2014.(査読有)

木村至聖, 「生活戦略からみる炭鉱社会像の再考 北海道岩見沢市朝日町における「出面取り」の事例から」『甲南女子大学研究紀要(人間科学)』49: 121-31, 2013.(査読無)

〔学会発表〕(計12件)

KIMURA, Shisei, "Construction of 'Authenticities': A Case Study of Gunkanjima in East Asia", *Re-thinking Tourism in East Asia*, March 12th, 2016, Hokkaido University, Sapporo (JAPAN).

木村至聖, 「文化の表象をめぐるスケールのポリティクス 軍艦島の「地元」高島を事例として」『第14回九州人類学研究会オー

タム・セミナー』, 2015年11月21日, 基山町民会館(佐賀県三養基郡基山町).

木村至聖, 「デザインされる国土と「文化」 「明治日本の産業革命遺産」をめぐる地域社会の葛藤」『地域社会学会研究例会』, 2015年10月3日, 明治学院大学(東京都港区).

木村至聖, 「文化遺産化ゲームと観光現象」『東アジア観光文化研究会シンポジウム』, 2015年8月1日, 北海道大学(北海道札幌市).

木村至聖, 「なぜ過去の遺物を保存するのか 社会学の視点から」『第42回住総研シンポジウム』, 2015年7月17日, 学士会館(東京都千代田区).

木村至聖, 「「観光者3.0」は電子化された文化遺産の夢を見るか? 産業遺産/世界遺産の文脈から」『第4回観光学術学会大会』, 2015年7月4日, 阪南大学(大阪府松原市).

木村至聖, 「近代産業はいかに記憶されるか」『日仏社会学会大会』, 2014年10月25日, 関西学院大学(兵庫県西宮市).

KIMURA, Shisei, "Branding of an Industrial Heritage and Practice of Local People: The Case Study of Gunkan-Jima", XVIII ISA World Congress of Sociology, July 19th, 2014, Pacifico Yokohama (JAPAN).

木村至聖, 「労働空間の文化遺産化 「明治日本の産業革命遺産群」を事例として」『第65回関西社会学会大会』, 2014年5月25日, 富山大学(富山県富山市).

木村至聖, 「テレビ番組における産炭地の表象とその変容に関する研究」『日本マス・コミュニケーション学会』, 2013年10月26日, 上智大学(東京都千代田区).

木村至聖, 「石炭産業の終焉はいかに記録/記憶されたか NHK アーカイブス学術利用トライアル研究から」『第86回日本社会学会大会』, 2013年10月13日, 慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区).

木村至聖, 「「記憶」化される炭鉱: 筑豊炭田の事例を中心に NHK アーカイブス学術利用トライアル研究から」『第64回関西社会学会大会』, 2013年5月19日, 大谷大学(京都府京都市).

〔図書〕(計3件)

木村至聖, 『産業遺産の記憶と表象 「軍艦島」をめぐるポリテクス』京都大学学術出版会, 全272, 2014.

木村至聖, 「「文化遺産」と戦争をめぐる問い」福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編『戦争社会学の構想 制度・体験・メディア』勉誠出版, 415-9, 2013.

木村至聖, 「軍艦島 廃墟 or 産業遺産?」石田佐恵子・山中千恵・村田麻里子編『ポピュラー文化ミュージアム 文化の収集・共有・消費』ミネルヴァ書房, 97-8, 2013.

(1) 研究代表者

木村 至聖 (KIMURA, Shisei)

甲南女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 50611224